

「ヨハネによる福音書」を読む（第11回）

## ヨハネ福音書 第20～21章

2010年6月13日（東京 新宿）

### ●共観福音書の復活の記事

今日は、前半でヨハネ伝20章、21章をいたしますが、後半はそのヨハネ伝全体の締めくくりを、ヨハネ伝総括をいたします。

皆さん、どうですか、

「聖書を毎日、読みなさい。一日に1章は読みなさい」

「順序立てて読むんでしょうか、どこを読べいいんでしょうか。パツと開いた所を読めばいいんでしょうか」

とか、いろいろ皆さん、聖書の読み方で苦労しておられると思う。

一番苦労しているのは私ではないかと思う。なにせ皆さんの前でお話するのに、どんなふうにお話したらいいのかと思って、聖書にぶつかります。そうすると、本当にこれは不親切な書ですね。こんな不親切な本を今の世の中にポンと出して、「これを読みなさい」なんてことを平気で言える人の気が知れないという気持ちを私は持っています。

皆さん、そんなことを思わないですか。ただただ「聖書はありがたい」とか言って<sup>まつ</sup>祀り上げたり何かしたら、私はちよつとそれはおかしいのではないかと思う。というのは、たとえば復活の所をご覧なさい。十字架の場面ですら、福音書なんてみな食い違っているでしょ。復活の所を見ても、その食い違いがひどい。気がつきませんか。そういう所を気にして読んだら、「いったいどうなっているんだ？」ということになってきますよ。

自分たちは現代に生きている。二千年前の復活という出来事が今の自分にどういう関わりを持っているのだろうかという事で、これを受けとっていくのは一つの角度だと思えます。そして、闇の中に光が灯る。その姿が、たとえば自分が失望落胆し、時には絶望しかけるような真つ暗な所に、キリストの光がポツと灯る。それによって自分は甦えるという。それと復活とを結びつけて、その生活体験とする。これも一つの受けとり方、体験だと思うけれども。いや、その程度では、とてもとてもこの復活の所は終わらないですね。ここは大変な所です。

それはそれとして、理屈を言わないで、まずは実物にぶつかっていくことにいたしました。う。実物にぶつかると言いましても、前回もやりましたように、福音書は四つありまして、



マタイ、マルコ、ルカという三つのいわゆる共観福音書——同じ観方をしているような福音書——をだいたい時間的順序を追いつながら、キリストのなさったこと、言葉、御業をずつと辿っていつて、最後は十字架、復活そして昇天という流れで書かれているのが三つの福音書でした。それに対して、ヨハネ伝は全く切り口が違うということをこれまでにも言ってきたわけです。非常に前の三つの福音書とヨハネ福音書とは、取り扱い方が違っている。全く違うかというところ、そうではなくて、やはり所々共通な場面が出てくる。「五つのパンと二匹の魚」という所とか、共通なものが所々あるけれども、全体として見ますと、ずいぶん感じが違う。しかしながら、最後の十字架の場面、それから復活の場面、それは共通なものがあります。だから、我々はいったいこれをどういうふうな受けとっていったらいいんだろうか、ということに絶えずとまどうというのが私の実際です。

どの福音書も共通してますのは、

「弟子たちは、墓の中が空っぽであるということに非常にとまどった」

というのがあっても、イエスが復活されたということには気づいていない。この点は共通だと思う。

まず、ヨハネの福音書で復活の所を見ます。ヨハネ伝20章。

「一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤ墓にきたりて、墓より石の取除けあるを見る。」（ヨハネ20・1）

この「マグダラのマリヤ」が一番先に墓に来了。他の福音書ではマリヤ一人ではありません。たくさん女性のたちが行っている。たとえば、ルカによりますと、ルカ伝24章。

「一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。<sup>2</sup>然るに石の既に墓より転し除けあるを見、<sup>3</sup>内に入りたるに、主イエスの屍体を見ず、<sup>4</sup>これが為に狼狽えおりに、視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。」（ルカ24・1～4）

と書いてます。それからマルコによりますと、マルコは非常に簡単です。マルコ伝16章。

「安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ、往きてイエスに抹らんとて香料を買い、<sup>2</sup>一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。<sup>3</sup>誰か我らの為に墓の入口より石を転すべきと語り合ひしに、<sup>4</sup>目を挙げれば、石の既に転しあるを見る。この石は甚だ大なりき。<sup>5</sup>墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。<sup>6</sup>若者いふ『おどろくな、汝らは十字架につけられ給ひしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦えりて、此処に在さず。視よ、納めし処は此処なり。』<sup>7</sup>されど往きて弟子たちとペテロとに告げよ」（マルコ16・1～7）

と書いてある。マタイのほうを見ますと、マタイ伝28章。

「さて安息日おわりて、一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤと他



のマリヤと墓を見んとて来りしに、」（マタイ28・1）

ここは二人です。こういうふうには、まずお墓を見に行つた人たちは、共通なことは女性です。男は行つてない。男は女性たちから聞かされて、それでそれを「本当かな!？」と思いつながらでも行つたんでしょね。マタイ伝では、さらにその前日のことが書いてあります。十字架の場面です。マタイ伝27章。

「<sup>57</sup>日暮れて、ヨセフと云うアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、<sup>58</sup>ピラトに往きてイエスの屍体<sup>しかばね</sup>を請う。ここにピラト之を付す<sup>わた</sup>ことを命ず。<sup>59</sup>ヨセフ屍体<sup>きよ</sup>をとりて淨き亜麻布につつみ、<sup>60</sup>岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を転しおきて去りぬ。」（マタイ27・57～60）

ヨセフが石を転がして墓をふさいだ。ヨセフがふさげるくらいなら、他の人も動かせるのではないかと思ひますけれども、他の福音書では「人の力ではどうにもならないくらいでつかい石だ」と書いてある。

昔のお墓というのはどうなっているのでしょうか。何か少し小高い所なんではないか。岩盤の固い所に洞穴を掘つて、そこに封印をするのに石を置くとか。とにかくやや高い所で深く掘つた洞穴のような中に遺体を納めるような感じがします。だから、「中を覗きこむ」とか、「石で封をする」とか、そんな情景が思い浮かびます。

それに関して、マタイ伝によりますと、

「<sup>62</sup>あくる日、即ち準備日の翌日、

安息日の日のことですね。十字架にかけられて、墓に葬られたその翌日、つまり安息日。

祭司長らとパリサイ人らとピラトの許に集りて言う、<sup>63</sup>『主よ、かの惑すもの生き居りし時「われ三日の後に甦えらん」と言いしを、我ら思ひいませり。

<sup>64</sup>されば命じて三日に至るまで墓を固めしめ給え、恐らくはその弟子ら来りて之を盗み、「彼は死人の中より甦えり」と民に言わん。然らば後の惑は前のよりも甚だしからん』<sup>65</sup>ピラト言う『なんじらに番兵あり、往きて力限り固めよ』<sup>66</sup>乃ち彼らゆきて石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。」（マタイ

27・62～66）

こういうふうには、ご丁寧に兵隊さんたちに守らせたとあるところがある。ところが、このマタイ伝によりますと、

「さて安息日おわりて、一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて来りしに、<sup>2</sup>視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転し退け、その上に坐したるなり。<sup>3</sup>その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。<sup>4</sup>守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。<sup>5</sup>御使こたえて女たちに言う『なんじら懼るな、我なんじらが十字架につけられ給ひしイエスを尋ぬるを知る。<sup>6</sup>此処には在さず、



その言える如く甦えり給えり。来りてその置かれ給いし処を見よ。<sup>7</sup> かつ速<sup>すみや</sup>かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦えり給えり。」

そう告げろと言う。だから、マタイ伝によると、たくさん番兵が守っていたけれども、地震が起こって——小池先生は「霊震」、霊的な震動だというふうに言っておられる——石が動く。番兵どもはまるで死人のごとく青ざめてしまったという。その番兵はどこへ行ったのか知りませんが、女たちが来てみたら、天使がいて、「イエスは甦られた」ということを告げる。

視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処<sup>かしこ</sup>にて謁<sup>まみ</sup>ゆるを得ん」と告げよ。

視よ、汝らに之を告げたり』

これは三つの福音書で共通なんです。「イエスはガリラヤで弟子たちにお会いになる」と、このように天使は告げている。

<sup>8</sup> 女たち懼<sup>おそ</sup>れと大なる歡喜<sup>よろこび</sup>とをもて、速<sup>すみや</sup>かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』と言ひ給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拜す。<sup>10</sup> ここにイエス言いたもう『懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処<sup>かしこ</sup>にて我を見るべきことを知らせよ』（マタイ

28・1～10）

まず女たちにイエスはここで現れておられる。ご丁寧に、復活されたイエスさまが、マタイ伝では「ガリラヤで会うからね、ガリラヤで会おうよね」と。ガリラヤというのは北の方でしょ。十字架はエルサレムの城外です。場所的に30キロ位離れているのではないかと思う。とにかく直ぐの所ではない。間にサマリヤがあります。イエスは行ったり来たりなさっていました。けれども、ガリラヤ湖のあるガリラヤ地方とエルサレムは明らかに違うところが、「ガリラヤで会おうよ」ということをイエスは言っておられる。

それから、マルコのほうで見ますと、マルコ伝16章。

「<sup>4</sup> 目を挙げれば、石の既に転しあるを見る。この石は甚だ大なりき。<sup>5</sup> 墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。

これは一緒ですね。

<sup>6</sup> 若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦えりて、此処<sup>いま</sup>に在さず。視よ、納めし処は此処なり。<sup>7</sup> されど往きて弟子たちとペテロとに告げよ』汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処<sup>かしこ</sup>にて謁<sup>まみ</sup>ゆるを得ん、曾て汝らに言ひ給いしが如し』<sup>8</sup> 女たち甚く驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言<sup>こと</sup>をも人に語らざりき。（マルコ

16・4～8）

こういうことで終わっている。だから、少なくとも、マタイ、マルコによると「ガリラヤで会おう」ということを仰っている。



では、ルカ伝ではどうなっているかを見ますと、ルカ伝24章。

「一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。<sup>2</sup>然るに石の既に墓より転し除けあるを見、<sup>3</sup>内に入りたるに、主イエスの屍体を見ず、<sup>4</sup>これが為に狼狽<sup>うろた</sup>えおりしに、視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。<sup>5</sup>女たち懼れて面<sup>おもて</sup>を地に伏せられたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。<sup>6</sup>彼は此処に在さず、甦<sup>おも</sup>えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶<sup>おも</sup>い出でよ。<sup>7</sup>即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付<sup>わた</sup>され、十字架につけられ、かつ三日めに甦<sup>すべ</sup>えりべし」と言い給えり』<sup>8</sup>ここに彼らその御言を憶い出で、<sup>9</sup>墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。<sup>10</sup>この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。

ルカ伝でも何人かの方がお墓に行つて、そして事の次第を使徒たちに告げたけれども、<sup>11</sup>使徒たちは其の言<sup>ことば</sup>を妄語<sup>たわごと</sup>と思つて信ぜず。

全然、復活なんてことは頭にないわけです。「この女性どもは何をくだらんことを言つていのか」と、そういうふうを受けとつているわけです。ところが、

<sup>12</sup>「ペテロは起<sup>た</sup>ちて墓に走りゆき、屈<sup>かが</sup>みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰れり」（ルカ24・1～12）

これが挿入されている。それからあとは、エマオ途上のお話です。

### ●ヨハネ伝の復活の記事

そしていよいよ、ヨハネ伝にまいりますと、

「一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤこれは一人です。

墓にきたりて、墓より石の取除けあるを見る。<sup>2</sup>乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処<sup>いずこ</sup>に置きしか我ら知らず』

まずマグダラのマリヤが行つてお墓を見たら、空っぽだった。それで驚いて帰ってきて、ペテロとヨハネ、これは家がどの程度近くなのか、何も書いてない。ペテロに言い、それからこの「イエスの愛し給いしかの弟子」——ヨハネですね——そのもとに至つて言う。二人一緒に住んでいたわけではないと思う。別々にいるんだけど、多分、近くなんでしょうね。この二人は一緒に墓へ行こうとした。ところが、おもしろいのは、二人は同時にスタートしたけれども、ヨハネのほうが早かったと書いてある。

<sup>3</sup>ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。<sup>4</sup>二人ともに走りたれど、かの弟子



ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、<sup>5</sup>屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。<sup>6</sup>シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、<sup>7</sup>また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。

この書き方は詳しい。大きな布でからだ全体を巻く。それから今度は、手拭いで顔を覆うそうです。二つある。大きな布は別の所、手拭いはまた別の所に、別々にしてある。しかも、手拭いのほうは畳んで置いてある。そして、先に墓に来た「かの弟子」ヨハネも、あとからペテロに続いて入ってきた。「あつやっぱりない」と。

<sup>8</sup>先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。

この「之を見て信ず」は何を言っているのか私にはわからない。フランススコ会訳の聖書の註では、「これは復活を信じた」と書いてある。でも私には、そこまではちよつと読み過ぎではないかという感じがする。と言いますのはその次に、

<sup>9</sup>彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。

と書いてある。「必ずイエスは甦りたもう」と、そのことが御口からも語られていたし、旧約聖書にも書かれているのに、それを悟っていなかった。悟っていなかったけれども、ここで「見て信じた」のかということになりますけれども。どうもこの「見て信ず」というのは、「ああ、やつぱり女たちの言った通りだな」というくらいではないだろうか。これは単なる想像です。ここだけ「信ず」という言葉が出てくる。どちらにしても、こういう情況の中で二人はそれぞれの家に帰った。

<sup>10</sup>遂に二人の弟子おのが家にかえり。

では、マリヤはどうしたのか。ペテロとヨハネに「こうでしたよ」と言つて、ペテロとヨハネが走つて来たでしょ。そのあとまたマリヤさんは多分追つかけて来たんでしょね、もう一度。ペテロとヨハネは「あ、ないわ。帰ろう」と。ところが、マリヤはそんなに簡単に帰れるものではない。それはそうですよね、男というのは水臭いですね、「ああないわ、しょうがないな」と、また帰つてしまったけれども、マリヤさんはそんなに帰れない。そこでさめざめと泣いていた。泣きながら、やはりもう一度お墓の中を覗いてみた。

<sup>11</sup>然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて墓の内を見るに、<sup>12</sup>イエスの屍体の置かれし処に、白き衣をきたる二人の御使、首の方<sup>こつべ</sup>にひとり足の方にひとり坐したり。<sup>13</sup>而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰かわが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』<sup>14</sup>かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、されどイエスたるを知らず。<sup>15</sup>イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守<sup>そのもり</sup>ならんと思つて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』<sup>16</sup>イエス『マリヤよ』と言ひ給う。



この「マリヤよ」という呼びかけ、これでもうハッと気がついた。これはイエスの呼びかけだと。

マリヤ振反りて『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。<sup>17</sup>イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて

イエスは弟子たちのことをもう「弟子」とは言わない。「兄弟たち」と言う。自分が長男で、兄弟たちと言つて、同じレベルで語つていらつしやいます。

「我はわが父すなわち汝らの父、わが神すなわち汝らの神に昇る」といえ

全く同格なんですね、弟子たちと復活された主イエスは。「兄弟」とよび、神さまのことを「汝らの父」「汝らの神」と呼んでいる。

<sup>18</sup>マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々  
の事を言い給いしと告げたり。

ここでは「ガリラヤ」のことは全然出てこない。「ガリラヤで会うから」とかいう話は全然出てこなくて、弟子たちはそのままエルサレムにずうつと留まつている。

<sup>19</sup>この日すなわち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて、居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』<sup>20</sup>斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。<sup>21</sup>イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』<sup>22</sup>斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊をうけよ。<sup>23</sup>なんじら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』

<sup>24</sup>イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、<sup>25</sup>他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマスいう『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらずば信ぜじ』

「そこまでやらなければ、お前さんたちみたいに簡単に信じるものかね。そんなバカなことがあるかね」

と、これが人間の普通の思いでしょ。ルカ伝でも、女たちが「イエスが甦られた」ということを言つても、「妄語たわごと」と思って信ぜず」と書いてあるくらいですから。だから、このトマスは普通なんですよ。他の弟子たちは立派かというところではない。イエスのほうから現れて来られたから。しかも、ユダヤ人が恐いものですから、つまり、犯罪人として処刑されたイエスの一族郎党なんですから、捕まったらまた酷い目にあうということで、固く戸を閉じて、いわば恐れていた。そこへスーツとイエスが入つて来られた。「平安なんじらに在れ」という御声と共に手と脇を見せられた。見える姿で現れてくださった。そこで弟子たちは喜んだわけです。「弟子たち主を見て喜べり」とあります。ですから、これはトマス



と他の弟子たちが逆な立場になったら、同じことをやっているはずですよ。トマスだけか先にこういう場面に出くわす。他の者たちがやって来て、トマスが「私は主を見たんだ」と言っても、「そんなバカなことがあるか」と。同じだと思えます。要するに、人間というものはそのくらいに絶対次元の神さまの世界のことは受け入れようがないんですよ。だから、キリストは物凄く苦勞してご自分を現しておられる。やつとこき彼らは信じた。信じられども、そのあとまたどうなっていくかは、次の21章に行きますと、ガリラヤへ行つて漁をやっている。「聖霊を受けて伝道に出かけろ」ときつと仰っているはずなのに、21章のほうではそうでない記事が出てきます。

このトマスに対しては、イエスは八日後にもう一度現れた。今度はみなが一緒にいる時に現れた。

<sup>26</sup>八日ののち弟子たちまた家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』<sup>27</sup>またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』<sup>28</sup>トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』<sup>29</sup>イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福なり』（ヨハネ20・1～29）

「見たから信じたんだろ、見ないで信じる者は幸せなんだ」

と。本当の信というのは、見ないで御言を信ずる。

「私は必ず甦ると言つたではないか。私は必ず十字架にかけられる。これも言つたではないか」

と。それを自分たちの経験だとか、経験法則とか、今までの過去の歴史とか、何かそういった諸々の、地上の我々の人間間の経験、経験則、言い伝え、積み重ねられた実績、そういう諸々のもので判断するのではないよと。

「全く新しい事態がここに起こっている。新しい事態が起こらなければ、あなた方に生命はないんだから」

と、これが一番キリストが我々に、そしてまた聖書が我々に訴えようとしていることだと思ふ。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず」

と言われた。今までの延長線上には新しいことは起こらない。

## ●永遠の生命

ヤコブのあの井戸の話もありましたね。「アブラハム・イサク・ヤコブ」のヤコブの時からずうつと今に至るまで1500年から2000年近く、ずうつとこの井戸から水を汲んで今に至るまで脈々と命が繋がれてきた。つまり、肉体の命を繋ぐ命のリレーをこの井戸



の水がやってくれた。

「あんたは素手でいながら、『お前さんが願い出るなら、私は尽きない水を与える』

なんて、大法螺を吹いてよろしいんですか？」

と言って、サマリヤの女が得意になって言います。ところが、問答しているうちに、桁が違うということがわかった。「あんたは夫が五人おったけれども、今のは違うね」と言われて、びつくりして飛び出して行つた。

あのように、我々はやはり歴史を重んじますよ、今までの経験も重んじます。こういった人間のさまざまな歴史、文化、伝統、言い伝え——宗教もあるかも知れませんが——そういったものの集積の上に何か新しいものがあるのではなくて、全く別次元のものが差し込んできた。それに会ったら、驚き、ただただそれこそ——俗な言葉ですけれども——平伏す。

「参りました。降参しました！」

と。そこへ行かなければ、この聖書の扉は開かれない。生命の扉は開かれない。ところが、人間は「自分たちの積み重ねの上に出来上がるはずだ」と固く信じていますから、そこで衝突が起こってしまう。あの重い重い石も神の霊震が起こって——「地震」とあります——それで石が動く。

使徒行伝にもさまざまな不思議なことが起こっていますように、神さまのなさるのは、ただ奇蹟を起こしてびつくりさせるのではない。今までの人間の蓄積の上には新しいものは生まれえない。準備としてはいいかも知れない。けれども、その先にあるのではなくて、上から、

「人は上から、新たに生まれなければ、この神の生命の次元にはこない。そのこと

を端的に受けとってほしいんだよ」

という、これがメッセージだと思う。

大体、「復活」ということも未だかつてなかったことでしょ。エリヤは火の車に乗って天へ生きました。エノクは「見えなくなりき」と書いてある。だから、エノクとエリヤは肉体が——肉体のままと言いましようか——天へ行ってしまったけれども、あれは本当に例外中の例外です。普通はどんな人も死というものに直面し、それを乗り越えられないわけです。

どんなに深い愛を持っても、それを乗り越えることはできない。ラザロの死が表している。マルタもマリヤもただ泣くしかなかった。「終りの日の甦り」は知っています。遠い遠い先の話で、ちつとも今の自分の慰めにもならない。死というものはそのくらい残酷で、人々からあらゆる希望も喜びも奪いとって、全部をナッシングにしてしまう。叩きのめしてしまふ。それが人間の現実なんです。みんな呑気な顔して浮かれているだけなんです。あのテレビのお笑い番組を見たら時々、私はふつとそういうことを思う。……あれは裏返しで、人間というのは実には儂<sup>はかな</sup>くて、いつどんな目に合うかわからない。いつ死が襲ってくるかわからない。だから、せめて今、そういう深刻なことは忘れて、今という時間を楽しもうではないか、思い切り楽しもうではないか、そういうことをあの番組は表してい



るのではないだろうかと思う。

本当にキリストという方はあの「永遠の生命」を表して、しかも、

「永遠の生命をお前たちに与えたいから、私はこの世に遣わされてやって来た。

自分から来たのではない。遣わし給う方、父なる神の御意を身に体してここへやって来た。自分から来たのではない」

ということを書いておられる。しかも、その方の御意は、

「あなた方は永遠の生命を得る。死んでも死なない生命を得る」

と。その一つの表れがああ復活という姿です。ああいう姿にみな変貌する。その事態を単なる「信ずる」とか、思い込んで「慰める」とか、そんなレベルではない。これはリアリティだ、これこそが本当のリアリティであって、それに比べれば地上は正に影のようなものです——ポジとネガとありますね——そういう程度のものにすぎないということをイエスという方は表しておられる。これは我々の理性なんかで受けとれるものではない。将来の体験の中から、いろんな日常生活の辛いことや悲しいことや、そういうさまざまなことにぶつかりながら、その時にキリストの言葉がキラリキラリと光って、

「ああ、この御言はこのことを言ってくれていたのか。この御言はこれだったのだな」

とか、そういう形で自分の血肉となしていく。

「わが言は靈なり生命なり。肉は役立たない」

と。つまり、「肉」というのは、今の人間の経験則とかそういうたささまさまのもの、我々が積み重ねてきたもの、我々が尊んできたもの、それは絶対次元というところから比べたら、これは全然違うんだよと。「肉は役立たない」と言われると、

「それではまるで自分たちの生活経験、文化、その他さまざまのものを全部粉々に砕いてナッシングにしてしまうのか」

というと、そうではない。次元が違うということ。永遠の生命という、その絶対的なものに対比するならば、それは桁違いである。まるで世界が違うんだ、別世界だと。

「あなた方は別世界にまで入らなければ承知できないように創られているんだ。神

さまはそのように人をお創りになった。」

と。「死んでゼロになつて、それで満足だ」と言う人は誰もいない。いくら自分で言い聞かせても、いくら悟りを開いても、それは決して本ものではない。一時的な悟りはあっても。やはり人間というのはみな永遠を慕うんです。この生をいただいた以上、この生が単なる一時的なもので、あとはもう死滅して、ただ人の記憶にだけ残っているだけであって、全くナッシングである。それでは我々は耐えられないだろうと思う。特に愛する者、自分が最も大事にしている存在、それがそれつきりだということで本当に人は耐えられるのだろうか。そんなふうに人間というものをお創りになるはずがない。



古来のどの宗教も「永遠の生命」ということを求めてきたと思う。たとえば中国なんかでは、「不老長寿」ということは——あれは復活ではありませんけれども——永遠の生命でしよ。いつまでも死なない生命を求めてきたわけです。仏教の世界でもやはりそういう世界に憧れているのだと思います。お釈迦さんがそれを説かれたかどうかは私は知りませんが、お釈迦さんにしろ、本来の姿というのは、世の中は「無常」だということ。「生老病死」とかい。この世の現実というのは実に惨憺たるものだ。それを直視して、それに執着しない。そこから「解脱<sup>げだつ</sup>」する。解脱した先、どこへ行くんですかと、それは何も仰っていないと思います。後世の人たちがその「涅槃<sup>ねはん</sup>」の世界を思い浮かべ、そして親鸞なんかにおいては、それは「弥陀の本願」によつてそういう絶対界、仏の弥陀の世界に救い上げられるという教えが流れてきたと思いますけれども。果してお釈迦さまが説かれたのが、そういった永遠の生命の世界だったのかどうか、これは私はよくわかりません。

少なくとも、そういった人間のこの世のさまざまな我々を苦しめているものから解脱する、それに執着しない、囚われない。囚われるから苦しいんです。「始めから人間とはそんなものだ」と諦<sup>あきら</sup>めな」と。「あきらかにみる」ということでしょ、「あきらめる」というのは。だから、正に無常そのものに徹するのがお釈迦さまの世界ではなかったのかなと。仏教の方に聞いたら、また別の答えが返ってくるかも知れませんが、少なくとも私が見ているのは、その程度のことしか知らない。爆発的な喜びの世界、創造的なクリエイティブな世界、これは出てきてないと思う。

ところが、クリストの世界はクリエイティブなんです、生命を創造していくんです。しかもそれは一挙には下さらなかった——「ケチンボウ！」なんてね(笑)——始めからポカーンといいものを下さればいいのに、徐々に徐々になされている。これは旧約聖書の話ですよね。「なんでやねん？」といったら、アダムとイブの話になって、戒めを守らなかったから、蛇に騙<sup>だま</sup>されて、禁断の木の実を食べてしまつて、人間が賢くなつたから、本来与えようとなさっていた永遠の生命の世界から断絶された。そして、罪が、死が入り込んで、人間は絶望の日々を送るようになったというふうに、旧約聖書から説いています。そして、イスラエル民族は特別に選ばれた民族として神さまは鍛え上げようとなさつた。しかし、鍛え上げようとなさつたこの民族がまた——出来がいいから選んだ優等生ではなかった。「一番出来の悪いのを選んだ」とちゃんと書いてある——頑<sup>かたく</sup>なで強情でどうしようもないもので、これを選んだと。別な言い方をすれば、

「こんなどうしようもないのが愛されるんだから、どんな者も愛されるはずだ。こんなどうしようもない者も神の国に入れられるなら、他の誰もが入れられるはずだ」

と。そういう一つの奥義があるのかも知れませんが、あの旧約の歴史というのは惨憺たるものです。アブラハムのあたりはいいんですよ、祝福されていますから。ところが、あの



モーセから、エジプトで奴隷生活を送ったあの頃から、奴隷解放のモーセがやって来て、苦勞してリーダーになって、モーセは本当に神さまと不信の民との板挟みになって、本当に苦しんでいます。いい時はちやほやしているけれども、ちよつと自分にとって不如意なことが起こるともう呟いたり、モーセを責め始めますね。モーセに対する呟きは神に対する呟きです。つまり、不信そのもの。そして、モーセに律法が、十誡が与えられた。それから更に細則がたくさん出来上がって、その律法にがんじがらめの世界が作り上げられてしまった。そこでまた宗教は人を苦しめるものになったわけです。

それに胡座あぐらをかいて威張っている宗教家たちが、

「禍わざわいなるかな、学者・パリサイ人びとよ」

と言われた人たちです。その中にキリストが現れてきた。それを突き抜けて、本当の生命の世界を説かれた。でも、当時の人たちにとっては、それはあまりにも次元が高すぎて、まるで我々人間性には合わない。あまりにも高すぎて合わない。道徳的な面からいうと高すぎます。日常生活からいうと、基準が何もないんですよ。律法なら細則が全部出来上がっている。「ご飯を食べる時には手を洗いなさい」「外から帰ったらうがいをしなさい」なんて書いてませんけども(笑)、そういうふうに日常生活の隅々まで細かい細則が出来上がっている。道路交通法みたいなものですわ。「赤信号の前では止まれ」「車間距離はいくら」とか、そういうふうに全部、細々と日常生活の規律が張りめぐらされた、そういう律法の網の中に生活していた。そこへキリストがその網をズタズタに破って、本当の生命をもたらそうとした。そしたら、彼らからすると、「これは大変なやつだ、律法破壊者だ」と。しかも

「父(神)と私は一つである。父は今に至るまで働き給う。我也働きなり」

と言われた。安息日にですよ。ことごとく彼らの宗教観念と合わないことをズバリズバリと仰ったものだから、あぐくの果ては十字架でしょ。

そして、この十字架・復活の所を今我々は学んでいるわけです。こういう人類のというか、イスラエルの宗教の歴史の中でイエスという方がどういう存在であり給うのか。それを三つのマタイ、マルコ、ルカという福音書は、そういう歴史の中で、律法という世界の中で、しかしイエスという方はそれを桁外れな、律法を超越した世界から、天国のことを語っておられる。絶対次元のことをズバリズバリ、その通り語っておられる。それが展開している。

私はこの三つの福音書を読んでいますと、これは非常に共通性があるけれども、その三つの福音書全体を統括する原理はいったい何かということを探しても、出てこない。いろんなものがゴツチャに混ざっている。本当にゴツチャに混ざっていますよ。どれもこれも光っている。光っているけれども、その全体を統括する根本的なものは何か。ついに見えないというのが私の感想です。しかし、慕わしい。なぜ慕わしいかというと、イエスという人格その存在が慕わしい。神を父と呼び、そこに全部、自分を預け、己のことは求めない。人々の幸せばかりを願っておられる。しかもその幸せはいわゆるこの世的な幸せではない。病



気も治されたし、死人も甦らされた。しかし、イエスにとつてはそれは単なる手段であつて、「神の国本来の、本当の神の国ではこういうことは常態だよ、今の世とは違うよ。だから、あなた方は今までの生活を引っくり返して、ひたむきに神さまを信じなさい、神を受けとりなさい」

ということを言われたと思います、あの三つの福音書において。だから、そこで祝福されているのはどんな人かというところ、理屈抜きでイエスにすがった人なんです。たとえば、あの12年間、血漏を患つて癒されない女性は——律法によれば汚れた女は神さまの前に出たらいかん——でも、癒していただきたい、苦しい。医者にいくらお金をつぎこんでも、ちよつともよくならない。そこで、イエスのことを聞いて、その背後から衣の房にちよつと触つた。このお方の衣の房にでも触ればきつと生命が流れてくる、そう信じて触つた。そうしたら、たちどころにイエスの御体から生命が流れていった。そしてその瞬間に彼女は癒された。イエスご自身も気づかれた、

「誰かがさわつたね」

と。接触したのではない。「さわる」という意志的行為なんです。弟子たちは、

「群衆が押し合っているなかで、そんな「だれ？」というのはおかしいですよ」

「いや、ちがう。はつきりと、触つた。衣にふれた。力が出ていった。生命が流れていった」

と。でも、その女性は畏れおののいているわけですね。

「あなたの信仰があなたを救つた。安らかに行きなさい」

と。これがイエスの福音なんです。そこではつきりと「信仰」ということを言っておられる。「私をそのように無条件に受け容れた。それでいい」

と。やっぱりあの三つの福音書でも共通しているのは、このイエスという方を無条件に——イエスという方は絶対次元を体受して、そこに現れている方です。神さまのお使いですよ——そのお方にひたむきに理屈ぬきで、

「助けてください、生命を下さい、救ってください！」

と言つてすがつた人間に、サーツと流れていった。ところが、理屈をこねている者たちはみなだめだったわけです。人の側からはひたむきにすぎること。神さまの側からは絶対次元のものを時々サーツと流しておられる。

一人息子を失つて悲しんでいる寡婦、そのお葬式の行列にイエスは近づいて行つて、

「若者よ、起きよ！」

と言つたら、若者は起き上がってきた。そういう絶対的な恵みを無条件に与えていかれた。これはユダヤの観念では絶対ありえなかった。ユダヤの観念は、

「いいことをやれば報いがある。悪いことをすれば——つまり罪を犯せば——罰がある」



という応報観念の中で生きています。ところが、イエスは無条件ですよ。神の恵みは無条件だと。ヨハネ伝の始めに、

「律法はモーセを通して与えられたけれども、<sup>めぐみ</sup>恩恵と<sup>まこと</sup>真理はイエス・キリストを通してやってきたのである」

と、冒頭に出てきます。神さまの与え給うものは、本来その律法による義ではなかった。「律法を守って神の国に入る」というものではなかった。無条件の恵みを恵みとして受けとる人に生命を与え給う。それが本来のことだと。だから、

「律法はモーセを通して与えられたけれども、<sup>めぐみ</sup>恩恵と<sup>まこと</sup>真理はイエス・キリストを通して現れた。我々は恵みに恵みを加えられた。誰も神を見た者はいない。ただ父のみ懷にいる独り子なる神だけがこの神を顕した。」

と書いてある。だから、ヨハネ伝の第1章の1節から18節——「序文」と私はまとめて書きましたが——その序文の後半部は正に三つの福音書とヨハネ伝を結び合わせる<sup>かすがい</sup>銕の役割をしていると思います。しかも、あの三つの福音書の根本は、律法が表に出ていますけれども、実はそれを乗り越えた本当の神さまの絶対愛、絶対無条件の愛、これを無条件に受けとる者に流れていくということを仰っている。

先のことを言ってしまうかもしれませんが、来月からパウロの世界、ローマ書をやりますが、ローマ書はそれをきちつと論理的に、あるいは哲学的に基礎づけている。そういう書だと思う。ですから、三つの福音書があつて、ヨハネ伝があつて——間に使徒行伝という伝道の世界が挟まりますけれども——それからローマ書、ガラテヤ書が出てくる。まことに順序としてふさわしいというふうに思います。

### ●エルサレムかガリラヤか

話が前後しましたが、復活のところに戻りましょう。トマスのことを言っていた。人間というのはそのくらいに絶対次元のものを受けとるのは難しいということをお話したわけです。そして、その先の20章30節から読みますと、これはヨハネ伝の締めくくりなんです。

「<sup>30</sup>この書に録さざる<sup>ほか</sup>外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。

<sup>31</sup>されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。」（ヨハネ20・30～31）

口語訳で読みますと、

「<sup>30</sup>イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。<sup>31</sup>しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」（ヨハネ20・30～31口語訳）

ヨハネ伝の目的は、



「イエスは神の子キリストである、神の独り子イエス、そういうお方であるということを信じるためであり、また、そう信じて、イエス・キリストのみ名によって、み名を通して、あるいはみ名の中で、命を得るためである。」

と。つまり、「永遠の生命を得る」ということがヨハネ伝を書いた目的だとはつきり書いてある。これでヨハネ伝は実は終わっている。

では、皆さんは「21章はどうなったの?」と思われますでしょ。21章については、これは定説で動かないんですが、フランススコ会の聖書では、「エピローグ(付録)」としてありまして、その解説として次のように書いてあります。

「本章21章は、ガリラヤでのイエスの出現と、それに関連する出来事を述べたものである。あのヨハネの弟子であつた一編集者が、ヨハネから聞いたことを書き加えたものと考えられる。」

と。ヨハネ伝を書いた使徒ヨハネのお弟子さんが、ヨハネから聞いたことをまとめてここに付け加えたという位置づけなんです。20章までは、エルサレムでの出来事です。ところが、この付録としての21章は、ガリラヤ湖での出来事です。

それから、ついでに申しますと、さっきの三つの福音書では、

「ガリラヤで君たちに会うからね」

ということ、御使を通して語られたし、それからイエスご自身も女たちに語られました、「ガリラヤで会おうと伝えなさい」と。ところが、使徒行伝の一番始めを見てください。ルカ伝の続きが使徒行伝なんです。

ルカのほうでは、エマオのキリストのことが出てきて、エマオでキリストに出会った二人の弟子がすぐエルサレムへひき返します。そして、十一弟子がいるので、「こうだった」ということを伝えたところが、

「主は実に甦りてシモンに顕れたまえり」

なんてことを十一弟子は言っている。二人もまた道であつたことを言った。そこへイエスが顕れられた。お魚を食べたりなさった。そして、そのルカ伝の一番お終いのところを見ますと、24章49節に、

「<sup>49</sup>視よ、我は父の約し給えるものを汝らに贈る。汝ら上より能力<sup>ちから</sup>を著<sup>き</sup>せらるるまでは都に留れ」<sup>50</sup>遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げて之を祝したもう。<sup>51</sup>祝する間に、彼らを離れ「天に挙げられ」給う。」(ルカ24・49)

というふうにルカ伝は終わっている。そして、この使徒行伝はその続きなんです。使徒行伝1章。

「テオピロよ、我さきに前の書<sup>ふみ</sup>をつくりて、凡そイエスの行いはじめ教えはじめ給いしより、<sup>2</sup>その選<sup>え</sup>び給える使徒たちに、聖霊によりて命じたるのち、



挙げられ給いし日に至るまでの事を記せり。<sup>3</sup> イエスは苦難をうけしのち、多くの慥<sup>たしか</sup>なる証<sup>あかし</sup>をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、<sup>4</sup> また彼等とともに集りいて命じたまう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。<sup>5</sup> ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』

<sup>6</sup> 弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』<sup>7</sup> イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。<sup>8</sup> 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら<sup>ちから</sup>能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極<sup>はて</sup>にまで我が証人とならん』<sup>9</sup> 此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。雲これを受けて見えざらしめたり。

ここで昇天が完了している。だから、ここはエルサレムなんですね。

<sup>10</sup> その昇りゆき給うとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、視よ、白き衣を著<sup>き</sup>たる二人の人かたわらに立ちて言う、<sup>11</sup> 『ガリラヤの人々よ、何ゆえ天を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に挙げられ給いし此のイエスは、汝らが天に昇りゆくを見たるその如く復きたり給わん』<sup>12</sup> ここに彼等オリブという山よりエルサレムに帰る。この山はエルサレムに近く、安息日<sup>みちのり</sup>の道程なり。<sup>13</sup> 既に入りてその留<sup>たかどの</sup>りおる高樓に登る。』(使徒行伝1:1-13)

だから、全然ガリラヤなんかへは行っていない。そして、ペンテコステを迎えている。昇天してからの十日間祈っていたら、ペンテコステの聖霊降臨という事態になるわけです。ところが、このヨハネ伝の付録によると、これはガリラヤの出来事なんです。そこへイエスが顕れた。三つの福音書では「ガリラヤで会うぞ」と言いながら、弟子たちはエルサレムから離れていませんし、ヨハネ伝によるとエルサレムの出来事です。あ、「平安、汝らにあれ」で終わっている。そして、ヨハネの弟子が書いたこの付録ではガリラヤでの出来事が書かれている。

いったいこれはどれが本当なのか。私のような正直な人間はきりきりまいして「勘弁してください、お手上げです!」というのが私の叫びなんです。皆さん、納得なさいますか。そのくらいに、つまり聖書というのは目茶苦茶だということ。目茶苦茶な聖書を通して、本当のことを我々に訴えている。「そこへ突き抜けてください」ということを言いたい。だから、聖書を微にいり細にうがって、「キリストはここで言ったか、言わなかったか」なんて、そんなくだらないことをやっている聖書学者は呑気なもので、あれは暇つぶしです、私から言わせれば。なんでこれが我々に与えられているか——まあヨーロッパの人は放っておきましょう、我々は日本人です——日本人で、そしてしかも二千年後のこ



いう時代に生きている人間にとって、この福音書が、この証言がいったい何の意味があるのか、何を訴えたいのか。それを端的にずばり受けとる。そして、ヨハネの締めくくりにありますように、

「イエスを信じて、それによって永遠の生命を得る、これが究極目的だ」

と言ってくれている。そこに焦点を当てる。それを導いてくださるのが聖霊なんです。聖霊があなた方にすべてのことを悟らせる。もつと言え、他の福音書はみなガタガタだと。それはそうですよ。何十年も経ってから昔のことを思い起こして——テープレコードもビデオも何もない——そういう時代に言い伝えを聞いて、断片的なものを綴り合わせて、それぞれが編集して書いたところで、ピタッと全部一致したら、それこそ不思議なんです。それこそ口裏合わせだとは思えない。むしろ目茶苦茶だから余計、それでよろしい。目茶苦茶なものの中にも光っているものがある。その光っているものは何なのか。

### ●絶対次元の世界からの使者

全世界に共通なもの、どの民族であろうと、人間であるという点で共通です。我々は魂を持つている、霊を持つている。そういう霊を持った人間、これは単なる肉体的な存在で終わらない。歴史的な存在で終わらない。それを越えた、もつと別次元の、根源的な神さまと同じレベルのところへ引き上げようと、そこで永遠の本当の素晴らしい次の生活が待っている。それをしっかり受けとって、この混沌たる見ゆる世界に流されないで、しっかりとそこを見つめて、北極星のような動かない——他の星は動いていても北極星は動かない——そこから永遠の光を放ってくれている。キリストはまるで北極星のようなもの。

しかも、光は我々にも宿っている。太陽は動かない。しかし、その光は我々に届いている。そして我々を温めてくれる。そういうふうには、根源的な世界の中、根源界、その絶対界の、我々が手で触ったり、理性で考えてもとてもわからない、その絶対次元の世界を我々に見える姿で、肉体をとってイエスという姿で現れてくれて、我々と同じような生き方をしてくださる。しかし、そのお方は絶対次元を持つておられるから、まるで仰っていること為さっていることと、我々の経験とが合わない。合わないから、単純に否定して、「あんなものは作り話だ」と否定してしまうのも間違っているし、それを人間的な観念でいろいろ批判するのも間違っている。すべて絶対的なものの前に人々は口をつぐむ、降参するしかない。しかし、我々の心の叫び、呻き、これをキャッチして、

「わかつているよ、わかつているよ。だから、そういう所から脱出して、本当の永遠の生命の世界へあなた方を連れて行きたい。それを私は携えてやって来た。私を食べろ、私を飲め。私は天からくだってきた生命のパンである。モーセは確かにマナをくれた。しかし死んだではないか。しかし、私というこの生命のパンを食べる者は永遠に死なない。それを信じるか？」



と。一生懸命にキリストはあのパンの奇蹟をやって仰っているんです。だから、そういうところを我々はしかと受けとる。

「主よ、あなたこそ本当に私の永遠の導き主です。北斗七星のあの彼方の北極星のように、闇の世にいつも変わらないで光をくださっています。闇がなくなれば、太陽が私を照らし、私を温め生命づけてくれる。そのようにあなたは永遠の生命の主です。しかも、あなたは自分でおいでになったのではない。神さまから遣わされて、そのお方の御意だけを我々に伝えようとして来てくれました」

と。我々は、

「本当にご苦労さまでした。よくぞ来てくださいました」

と言いたいわけですよ。天からの使者ですからね。使者をお迎えするのに、それなりの礼が必要ですよ。そうでしょ。天皇陛下があちこちへおいでになる時に、みな鄭重に迎えますよね、自然に。キリストはもつともつと凄いお方でしょ。キリストは本当に天からの使者、神さまのお使い。神さまの御意を一身に体して。しかも、

「私は自分で何も言えない。何もできない。何ものでもない。ただ神さまが『語れ!』と仰ることを語っているだけ。『せよ!』と仰ることだけをしているだけ。どうして私を責めるの? 私を責めるのではなくて、私にそうさせておられるこのお方に文句を言ってくださいよ」

と、そういうことをキリストは言っておられるわけです。

ですから、我々は福音書とかいうものを、そういう角度から受けとっていきませんと、「論語読みの論語知らず」「聖書読みの聖書知らず」ということになります。

私はさきほどから言いましたように、我々は東洋人の中のまた日本人である。そして時代は現代である。現代という社会はどんな社会なのか。人類の歴史の中で現代というのはどういう時代なのか。世界は非常に小さくなったと言いながら、非常に冷たい、愛が冷えている。そういう社会でしょ。いろんな危機が迫っている社会です。この先、地球はどうなるか全くわからないような。地球は行き詰まっている。巨視的に見れば、黙示録的な世界が近づいているのかもしれない。

けれども、そういう「周りがどうなっているか」というのではなくて、我々にとつてはどこまでも、導きの星イエス・キリストという方が聖霊という姿で我々の中に宿り給う。

「聖霊、言い難き呻き<sup>うめ</sup>をもて執り成し給う」

という。やはり、我々にとつては霊なるキリストが死を蹴破つて、あのような素晴らしい霊体となって顕れて、父の御許にいらっしゃった。そして、我々にいつも聖霊という姿で臨んでくださって導いてくださる。

「霊的人格イエス・キリスト」

と私は申します。このお方はもう民族を越えたお方です。民族を越えたお方として、一人



ひとりの中に宿ってください、生命を与えてくださる。このお方をおいて他に、我々にいたい望みがあるのだろうか。この世的な望みではありません。永遠の望みです。絶対界に生きる望み、保証、確かさ、それはいつたいあるんでしょうかと。あるなら見せてほしいと私は言いたい。いろんな宗教論議をしたり、比較宗教学をやったり、そんな暇は私にはありません。明日、私の地上の命は終わるかもしれない。誰も保証されていない。長くても120年でしょう。みんなそこへ近づいているわけです、我々にとっては。そして自分のことだけではない。残っていく者のこともみな気になります。子どもたちの将来は、世界はどんな世界になっているんだろうかと、気になります。気になるけれども、希望というのが、皆さん、ありますか。子どもたちの世代はもつと良くなるとか、子どもたちはもつと遅<sup>たくま</sup>しくなるとか、子どもはもつと希望に輝くとか、もつと生き生きするとか、そういうものが何もないですよ、日本に関して言いましたら。そういう中で本当の生命の輝きを永遠のものとして我々にくださっているのが、イエス・キリストという霊的人格なんです。このお方を我々は「父」と呼び、「神」と呼び、「先生」と呼んで——何と呼んでもいいです——「友」と呼んでもいいし。要するに、私にとつてはよりすぎる唯一のお方です。

マグダラのマリヤはイエス・キリストにしがみついた。血漏の女性は衣の総<sup>ふき</sup>に触った。ツロ・フェニキアの女は自分の娘が悪鬼にとりつかれて苦しんでいるのを——多分、癩<sup>てんかん</sup>癩の病ではないかと思いますが——イエスは、

「いや、私はイスラエルにしか遣わされていない。食卓のパンを小犬に与えるのはよろしくない」

なんて差別的なことを仰ったが、そしたらその女は何と言いましたか。

「小犬であつても、食卓から落ちるパン屑はいただきます。パン屑で結構です。

立派なパンでなくていい。みなが食べて落としたパン屑でいい。それをくだ

さい」

と。つまり、

「主イエス・キリストさまの爪の垢でも結構です、それにすがりたいんです。すが

らせてください！」

と言った。これにイエスは完全に参ったんです。

「あなたの信仰は見上げたものだ。その言葉の通りになりなさい」

と。その瞬間に娘は癒されたというのが出てきます。

この私たちの必死な思い、これを代弁してくれているのが名もなき女性たち、あるいは病める人たち。福音書でいえば本当に名もなき見捨てられたような人たちが必死になつてすがつていった。それから、恵みを受けているのは、生まれながらに目が見えなくて乞食をしていた人だとか、そういう人たちにキリストのほうから近づいて行って、御業をなさっています。そういう角度で、神さまが私たちに与えようとなさっている絶対的な恵みは無



条件です。

「お前はいいやつだから。悪いやつだから。どんなことをしたから。お前の過去がどうだから」

とか、そういったいわゆる因果応報の世界、因縁因果の世界を突き抜けた絶対次元から、絶対的なものを無条件に与える。これに人間は耐えられない。

「がんばったから、報われるんです」

と、これなんです。

「努力したから、優勝できるんです」

と。これは地上の世界です。それはそれで立派なんです。でも、

「優勝して、それで永遠の生命があるんですか？」

と。それはないよな。それはこの世の喜びはある。努力が報われたという満足感はある。しかし、そういったこの世の満足感の世界——頑張った人にはノーベル賞もあるでしょうし、いろいろ頑張った人にはそれなりの報いあるけれども——

「それとは違うもつと凄い世界に來なければ、あなた方はやり切れないはずだよ」

ということをやっている。だから、それを立体交差だというふうに受けとってほしい。絶対次元を相対的な中へねじ込んで、それでそこをかき回そうとしたらだめです。「これはもう水と油」というふうに割り切つたらいい。割り切つたのがヨハネの世界です。

「ひと新たに生まれずば」

と言う。福音書の世界はゴチャゴチャしている世界です。ヨハネに行きますと、律法ということはほとんど出てこない。せいぜい、

「律法はモーセを通してやってきたけれども、<sup>めぐみ</sup>恩恵と<sup>まこと</sup>真理はイエス・キリストを通してやってきた」

「モーセはあなた方にマナを与えた。しかし結局は、人は死んだ。しかし、私が与えるパン——私は本当に生命のパンだ——それを食べる者は死なない」

と。それからイエスはサマリヤの女に、

「この井戸の水はヤコブの有名な井戸だけれども、それを飲んだって結局は死ぬ。しかし、私のところから流れてくる生命の水は、それを飲んだ人の中で泉となつて溢れ出て、尽きない永遠なる質のものである」

と言う。それから、

「あなた方はエルサレムで礼拝をする。我々はこのゲリジムでお祈りしている。いったいどっちなんですか？」

と聞いたら、

「いや、エルサレムでもなければ、ゲリジムの山でもない。霊と真<sup>まこと</sup>をもつて拝するする礼拝。場所はどこでもいい。どんなかつこうでもいい。霊と真を



もって拝する。」

つまり、全身全霊で

「主さまー！ 神さまー！」

と、心からの叫びあげてお祈りする、その祈り、その礼拝、これを父なる神は求めている。なぜならば、

「神は霊であるから、拝する者も霊と真をもって拝する」

と。そういうふうにして全部、次元が違うんですね。そのところをはつきりと受けとれば、どんなにガタガタに見えている聖書であつても、そこから生命を引き出すことができる。そういう読み方をなさつていただきたいと思います。

### ●ヨハネ伝21章

いよいよヨハネ伝21章のところに参りますが、ここは楽しいところなんです。のどかな春の風景という感じがしませんか。

「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。<sup>2</sup>シモン・ペトロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。<sup>3</sup>シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。<sup>4</sup>既に夜が明けたころ、イエスが岸に立つておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。<sup>5</sup>イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。<sup>6</sup>イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打つてみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。<sup>7</sup>イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとつて湖に飛び込んだ。<sup>8</sup>ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻つて来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

90メートルくらいです。

<sup>9</sup>さて、陸に上がつてみると、炭火がおこしてあつた。その上に魚がのせてあり、パンもあつた。<sup>10</sup>イエスが、「今とつた魚を何匹か持つて来なさい」と言われた。<sup>11</sup>シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであつた。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。<sup>12</sup>イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。



弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。<sup>13</sup>イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。<sup>14</sup>イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。」（ヨハネ21・1～14）

「三度目」と書いてありますね。使徒行伝では、「何度も何度も弟子たちに現れた。40日間にわたってしばしば現れた」とありますけれども、こつちのほうでは、やつとこれで「三度目」だ。しかも二度目は、復活された日の夜に現れた。八日目にまた現れた。そしてこれで「三度目」だと。そんなふうにごちらのほうでは数が少ない。しかも、現れた場所はガリラヤです。弟子たちはエルサレムにおったはずなのに、いつのまにかガリラヤに帰って漁師に戻っている。そういうふうなことですけれども。

しかも、このお魚の出来事はルカ伝の5章に、ちつともお魚が採れないで、ブーブー言っている時に、イエスが「沖へ漕ぎいでて、網をおろしなさい」と。ペテロはそれに従ったということが出ていましたね。あれと非常に似た記事です。ルカ伝5章を見てみましょう。

「イエスがゲネサレト湖畔に立つておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。<sup>2</sup>イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。<sup>3</sup>そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。<sup>4</sup>話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。<sup>5</sup>シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。<sup>6</sup>そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。<sup>7</sup>そこで、もう一そうの舟にいる仲間に加わって、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。<sup>8</sup>これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。<sup>9</sup>とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。<sup>10</sup>シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」<sup>11</sup>そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」（ルカ5・1～11）

こういうふうなルカ伝では、ペテロやヨハネたちがどのようにしてイエスに従って行ったかという出来事としてこれが書かれた。しかし、「二艘の舟にいっぱいになった」とか、こつちは「片一方の舟が応援にきた」とか、細かいところは違っていますけれども、なんと



く情況が似ている。それで、聖書学者の人たちは、

「このルカ伝の記事は、実は復活されたキリストの記事をこんなふうに表しているだけだろう」

と解説したりする。それは私にとつてはどうでもいい。でも、非常に似てます。そして、ヨハネのほうは非常にのどかな情景なんです。こっちのルカ伝のほうは、魚が採れないでブーブー言つて不満たらたらのところに、イエスは、

「沖へ漕ぎだして、網をおろして漁をしてみなさい」

と。ペテロは

「こんなにやってもだめでした。でも、お言葉ですから、やってみましょう」

と。万策つきて、何も採れなかった。しかし、イエスという方がそこで人々に教えておられた。その教えにみな感動しているはずですよ。その感動の中でペテロは、

「さあ沖へもう一回行こうではないか。沖へ漕ぎだして網を下ろそうではないか」

と、局面が変わっている。人間的に一生懸命にやったという局面が昨日夜明けまで。しかし今、朝、御言を聞いて、それから沖へ漕ぎ出て網を下ろそうと。新しいものが始まるうとしている。だから、「やってみます」と。やってみたら、凄いことになった。そう受けとりたい。我々の人生の中でもそうありたい。それがルカ伝のほうです。

ヨハネ伝のほうでは、彼らはまた漁師になって、今まで伝道者になるはずだったのが、どこかへいってしまった。イエスの弟子だったのがもう弟子でなくなったような感じで、漁師になってやっている。そこへイエスが現れた。魚が153匹も採れた。お魚も食べられた。そういう場面というふうに描かれている。

ヨハネ伝21章をもう一度見てください。

「<sup>3</sup>シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。<sup>4</sup>既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。<sup>5</sup>イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。<sup>6</sup>イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」

ここでは「沖へ出て行って」とは言っておられない。「舟の右側に網を打ちなさい」と。まさか波打ち際に下ろしてもしょうがないけれども、やはり少しは沖のほうへまた漕ぎ出て行ったのでしょう。

そこで、網を打つてみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。……。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻つて来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。



90メートル離れた所の仲間たちが応援に来たという形で書かれている。だから、状況は若干似てます。こういうのどかな情景があつて、そして15節からは、ペテロとイエスさまとの会話です。三度、ペテロに「私を愛するか」とお尋ねになる。「はい、あなたを愛します」と。そうしたら、「私の羊を養いなさい」と。また言われる。そういう場面が出てきます。

<sup>15</sup> 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たちが以上にわたしを愛しているか」と言われた。

「他の弟子にまさつて私を愛するか」と聞かれた。

ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。

<sup>16</sup> 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」

ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。

ここまではまだペテロは黙っている。三度目に、

<sup>17</sup> 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」

ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしが

あなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」

これはだいたい解説を見ますと、ペテロは十字架の前夜にイエスを三度否んだ。「鶏が二度鳴く前に、三度あなたは否む」と言われた。その通りになりました。三度否んだ。だから、イエスはここで三度「愛するか」と確かめられたんだと、解説されている。ペテロもまた三度も聞かれると、「俺はなんと信用されていないのか」というふうに思ったのかもしれない。それはわからないですよ、どういうバックグラウンドか。しかしながら、少なくともペテロは「なぜ、三度もお尋ねになるのか。俺はそんなに信用がないんかね!？」ということとかもわかりませんけれども。イエスは言われたのは、

「わが小羊を養いなさい」

と、これなんです。

「私を本当に愛してくれるなら、その愛を羊たち、弟子たちの仲間であると共に、弟子たちを通してこれからイエスの信者となる人たち、その者たちを養う大事な役目がある」

と。事実、ペテロは、カトリックでいいますと、いちばん教会の元祖です。ペテロが筆頭です。それを仰ったのだというふうに受けとれると思います。

三度も「私を愛するか」と言われた。しかも、「愛する」という原語がまた「アガパオー」という「アガペー」という言葉と「フィリオ」「兄弟愛」というものを表すのと入り交じっているというようなことが原文の言葉的には言われている。とにかく、三度言われたとい



うことで、ペテロはそれが身にこたえたわけです。

しかのみならず次に、ペテロに仰つたのはまた不吉なことを言っておられます。

「お前は若かったときはしたい放題のことをしてきた。行きたい所へ自分で行けた。自由自在に振る舞ってきた。しかし、年とつたらそうはいかん。手を縛られて嫌な所へ連れて行かれる」

と、殉教の預言をなさいました。事実、ペテロは殉教しました。「逆さ十字架」ということが言われています。

「<sup>18</sup>はつきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」<sup>19</sup>ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

<sup>20</sup>ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏切るのはだれですか」と言った人である。<sup>21</sup>ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。

何かペテロとヨハネはいつも張り合っている感じがですね、競争してみたりとか。しかもヨハネのほうが早かったとか。ヨハネは威張っているのでしょうか。

<sup>22</sup>イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」

冷たい話ですよね。つまり、ペテロはペテロ、ヨハネはヨハネ。そんなに比べあったり、たえず相手のことを気にしないで、ひたむきに私に従ってきなさいよ。それをお示しになったんでしょうけれども、やはりペテロはヨハネが気になる。しかも、ヨハネはいつもイエスのそばにぴったりくつついて、とても愛されている。ヨハネも「かの愛し給いし弟子」とか自分のことを言っているように。だから、ペテロは若干ひがんでいるのかもしれない。イエスは「すぐに来る、再臨は近い」と思っておられた。

「私が次にやって来るときまでヨハネが生きておつてほしいと願ったとしても、お前とは関係ない。ヨハネはヨハネ、ペテロはペテロ、それぞれの道を行け」

と言われたのに、「たとえ私が来るまでにヨハネが生きていることを望んだとしても」という、その部分が一人歩きして、「ヨハネは死なない」といううわさが流れたと書かれてある。

<sup>23</sup>それで、この弟子は死なないといううわさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしの来ると



きまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。

まるで小説の終り方みたいですね。とても楽しい終わり方をしている。最後の締めくくりが――「付録」（21章）の締めくくりですよ――

<sup>24</sup>これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。「この弟子である」というのは、ヨハネのまた弟子ということ。

わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。

<sup>25</sup>イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。」（ヨハネ21・3～25）

図書館はいっぱいになってしまおうという。

### ●ヨハネによる福音書の総括（レジメ）

これでヨハネ福音書は終わりなんですけれども、皆さんの所にお配りしてある「ヨハネ福音書総括」を簡単にお話して終わりたいと思います。

#### 《ヨハネによる福音書の総括》

##### 第1章1～18 序文

この箇所は、序文であるとともに、総括でもある。

この1章1～18節は、皆さん、いくら読まれても、なかなかスッキリと理解できないと思います。ですから、私は次のような形にまとめました。

天地・万物の創造前からの霊なる実在者である父なる神と、同質の霊なる実在者で

ある御子キリストとの共在のすがたを語る（①）。 ①17・5参照

ヨハネ福音書では、「神」とだけしかない。神がどういうお方かということは何も書いてない。

「はじめにロゴスありき」

と、「言があつた」というところから出てきます。

「言というものが神と共にあつた。この方は神であつた」

という書き方です。「①17・5参照」というのは註釈でして、ヨハネ17章5節は大祭司の祈りのところです。

「父よ、私がかつてあなたと共に持っていた栄光で今、輝かしてください」

と言っておられる。つまり、「父と共にありし栄光」というのは、この第1章の「神と共にあつた」という姿を指しておられると私は理解しました。

万物は、このお方（御子キリスト）によつて創造された。このお方は、いのち生命であり、光であり、愛であつた。

「この御言に生命ありき」とあります。これはまた光であつた。



霊なるキリストは、受肉して人々の間に、即ち、人間界に住まわれた。神は、このお方を信じて受け入れる人を「神の子」とする道を聞かれた（②）。②3・13～18：同31～36。

これは「②3・13～18：同31～36」に出てきます。

かつては、律法の実行による義の道がモーセを通して示されたが、「恵みと真理の化身であるイエス・キリストを信じ受け取ることによって、天国（永遠の生命）に至る道が聞かれたのである。受肉のイエスは、地上においても、その全存在が、いつも父なる神の懷に懷かれてあり、このお方だけが、見えない神（根源的・霊的実在者である見えない神）を顕していたのである」（③）。③14・9》

これは、

「父のみ懷にいます神の独り子であるお方だけがこの方を顕した」

というところを引いています。

「<sup>16</sup>我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、<sup>めぐみ</sup>恩恵に恩恵を加えらる。<sup>17</sup>律法はモーセによりて与えられ、<sup>まこと</sup>恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。<sup>18</sup>未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」（ヨハネ1・16～18）

こういう1章の1節から18節、これをまとめますと、ここに書きましたようなことになるだろうという事で、まとめてみました。しかも、そこに書かれていることが、以下のヨハネ伝の中に随所に出てきているわけです。

逆に言うと、このあとの1章19節から終わりまでの大事なところを抽出していけば、この1章1節から18節にまとめられる。それを先に越えたようなかたちで書かれています。1章19節からは、イエスがどういうお方で、どういうことをなさったか、どういうことを語られたかということが出てきますが、それも歴史的な順序ではありません。これが他の福音書とは全く違っているところです。まるでそれぞれの場面を立体的に、ドラマティックに描き出している。第一幕、第二幕、第三幕という、そういったドラマのような姿で場面場面が詳しく、しかもイエス・キリストの言葉が詳しく述べられています。

マタイ福音書なんかでは、イエスの言葉というのはいわば教訓的な言葉がたくさん出てくる。それに対して、このヨハネの語り口は全くそうではなくて、霊の次元の世界をイエスは諄々（じゅんじゅん）と解き明かしておられる。そういう印象をうけます。「あれをしろ、これをしろ」なんていうことは何も仰っていない。ヨハネのイエスの語りかけをみますと、「あれをしろ、これをしろ。これをすれば永遠の生命がくる」なんて何も出てこない。他の福音書だったら、「これをすれば生命に至る」とか。

「永遠の生命を得るにはどうしたらいいですか？」

「さあ、律法に何と書いてあるか読んでみなさい。律法の中で何が一番大事



か?」

と聞かれたら、

「心を尽くし、精神を尽くして、思いを尽くして汝の神を愛せよ。己の如く隣人を愛せよ」

とか。とにかく、「すべし、すべからず」ということが必ず出てきているんです、この共観福音書では。ところが、ヨハネにきますと、そんなことは何も出てこない。最後に出てくる。

「新しい戒めを与える。あなた方は互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」

と、そこで新しい律法というのが出てきます。それまでは、「あれをしろ、これをしろ」は何も出てこない。不思議なくらいに。

それから、6章へ行きますと、

「いったい我々は神の業<sup>わざ</sup>をするためには、どうしたらいいですか?」

と人々が聞きました。

「神の業とは、神の遣わし給うた者を信する、これなり」

と。神さまのわざ、神さまに喜ばれるわざ、人間の行うべき神的なわざは何か。神の遣わされた方を信する、それに尽きると言われた。ヨハネ伝で「何をすべきか」ということは唯一、「遣わされた方を信する」これだけだ。

端的にいいますと、キリストが神から遣わされてやって来た。そのお方を100%受けとる、これだけが人間のなすべき最大の務めだ、唯一の務めだ。これは神さまが差し出されたプレゼントで、これに尽きると。そこから先のことは神さまがなさるから。イエスご自身が遣わされてやって来られた。そして御意に従っているいろいろなことをなさっているわけです。しかも、御意は何かというと、

「信する者が一人も滅びないで、永遠の生命を得るこれなり。終りのときにこの人たちを甦らせる」

と言っておられる。ですから、非常にこのヨハネの福音書は単純にして、しかも主題は「永遠の生命」です。永遠の生命に至る道というのは、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらずば、誰も父のみもとに、天国に行けない。」

でしょ。

「絶対次元へ行くのは私というものを通ってしか行けない。その私を受けとる。これがあなた方のなすべき唯一のことだ」

という、正に信そのものです。信即生命、信即愛。そういうものをズバリと語っておられる。他に人間のなすべきことなんか何もないよと、そこまで徹底している。

だから、我々日本人は、ヨハネ伝にきますと、ほっとするんです。七面倒くさい律法の



世界から解放されていまして。「あれをしろ、これをしろ」とか、またややっこしい問答なんか何もないですから。パリサイ人たちは盛んに問答を吹っかけてきてますけれども、イエスはそれを全部はねのけて、超然としておられますよ。そういうことで、私たち律法というものと無縁な人間にとつては、このヨハネの福音書というのはとても近づきやすい福音書であると思います。

そういう角度から大事な所を見ていきますと、

《第1章19節》 重要なところ…

「見よ、これこそ世の罪を除く神の子羊」(1・29)

「これぞ、聖霊にてバプテスマを施す者」(1・33)

「見よ、これぞ神の子羊」(1・36)》

しかも、ヨハネの福音書で見ますと、洗礼のヨハネはどこでイエスに出会っているんだろうか。他の福音書では、人々にヨハネが悔い改めの洗礼を施していて、そこへイエスがやって来て、「私も洗礼を受けさせてほしい」と言われた。そして、問答をして、「わかりました。では、洗礼を施します」とやって、水から上られた時に、天が開けて聖霊が降ってきたとあります。ところが、ヨハネの福音書ではそういう場面が出てこなくて、ヨハネが、

「私に示されたところでは、ある人の上に聖霊がくだる、そのお方こそがメシヤだ」

という言い方をしています。1章29節から見ますと、

「<sup>29</sup> 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。<sup>30</sup> われ曾て「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは此の人なり。<sup>31</sup> 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに踰れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』<sup>32</sup> ヨハネまた証をなして言う『われ見しに、御霊鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。<sup>33</sup> 我もと彼を知らざりき。されど我を遣し水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。<sup>34</sup> われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』<sup>35</sup> 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、<sup>36</sup> イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』(ヨハネ1・29～36)

と言ってますから、ヨハネの証言の仕方がまるで他の福音書とは変わっています。でも、大事なことはここで早くも、「世の罪を除く神の子羊」と言う。これは正に十字架です。それから「聖霊のバプテスマを施し給う」ということ。そのことが出てきているということです。

それから3章にいきますと、これは何度もお話ししましたね。



## 《第3章

「人あらたに生まれれば、神の国を見ることは能わず」

「人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず、肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。」

およそ「律法」だとかいうものではない。ニコデモは律法の世界にいました。けれども、ニコデモが問答を求めて来たとき、全く別の角度からイエスは答えておられる。

「人あらたに生まれなければ、神の国を見ることができない。人は水と霊とによつて生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれた者は肉だ。霊にから生まれる者は霊だ」

と。これがさっきの絶対次元と相対次元の違いだと、それをここでズバリと言っている箇所ということで引きました。すなわち、

《新生への道は、神の遣わし給った御子キリストを信じ受け取る(信受する)こと。》

それに尽きるんだということです。それから4章へ行きますと、さきほどのサマリヤの女との対話の所が出てきます。

第4章 サマリヤの女との対話 キリストは「永遠の生命の水」の源泉

真の礼拝<sup>32</sup>：神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」

イエスの食物<sup>33</sup>：「われを遣し給える者(父なる神)の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、これ、わが食物なり。」

弟子たちが食物を求めてやつて来ましたら、イエスは、

「<sup>32</sup>イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』<sup>33</sup>弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』<sup>34</sup>イエス言い給う『われを遣し給える物の御意<sup>みこころ</sup>を行い、その御業<sup>みわざ</sup>をなし遂ぐるは、是わが食物なり。』(ヨハネ

4・32～34)

ということを言っておられます。

それから次に5章へ行きますと、あの38年間、病に苦しんでいた人を安息日に癒されしました。

《第5章 ベテスダの池での癒し(38年間、病に悩む人に対して安息日に)

「わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」

無的実存者(無者) イエス<sup>35</sup>：「子は、自ら何事をも為し得ず」

安息日は、人は休む。人は休んで、神さまの恵みを受ける時。神さまはそこで働き給う。

「父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」

と。このようにヨハネの福音書を読みますと、神さまは働き主、働き給うお方なんです。神さまは御業の神さまで。人間の側は休んでいる受け手なんです。どこまでもパッシブ(受動的)です。アクティブ(能動的)なものは何も出てこない。ただ信じ受けとる、そればかり



りなんです。

「神のわざとは何ですか？」

「遣わし給うた者を信じ受けとる。これが神のわざだ。人がもし神のわざをしたいというなら、まずそこから行け」

というふうにして、神さまはもっぱら能動的に働きたもう。それに対してはもっぱらそれを受ける。恵みとして受ける。この角度が貫かれています。そして、イエスご自身も、

「私は自分からは何もできない。御意のままに動いているだけだ。『なせ!』

と仰ることをなしているし、『語れ!』と仰ることを語っている。みんな語り

給う者は神ご自身である」

というふうに仰っている。だから、非常に能動的な活動的な神とキリスト。それに対して人の側はもっぱら受け手である。無条件の恵みとして受けていく時に、神の御意が貫かれていく。そういうことです。

それから、6章へ行きますと、

《第6章 大麦のパン五つと小さき魚二つ

「我は生命のパンなり」

「わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る、是なり。」

「われ(というパン)を食う者は永遠に活きる」

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。《

これも皆がお腹がへってクタクタにへばっているから、ああいう御業をなさっている。マタイ伝やマルコ伝を見ますと、二回出てくる。始めに「五つのパンと二匹の魚」の話が出てきます。これはヨハネ伝と共通です。それからもう一回出てくる。始めのほうは5千人です。次は4千人です。二回目は「七つのパンと二匹の魚」。しかも、二回目のほうは三日間この人たちは何も食べないでねばっている、がんばっている。だから、このまま帰すのは見るに忍びない。だからということが書かれている。

マルコ伝では、始めのほうは6章に出てくる。8章へ行きますと、

「その頃また大なる群衆にて食うべき物なかりしかば、イエス弟子たちを召して言い給う、<sup>2</sup>『われ此の群衆を憫む、既に三日われと偕におりて、食うべき物なし。<sup>3</sup>飢えしままにて其の家に帰らしめば、途にて疲れ果てん。』」

…<sup>6</sup>イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに与えて群衆の前におかしむ。弟子たち乃ちその前におく。<sup>7</sup>また小き魚すこしばかりあり、祝して、之をもその前におけと言ひ給う。<sup>8</sup>人々食いて飽き、裂きたる余を拾ひしに、七つの籃に満ちたり。<sup>9</sup>その人おおよそ四千人なりき。…<sup>15</sup>イエス彼らを戒めて言いたもう『慎みて、パリサイ人



のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ』（マルコ8・1～15）

とあります。他の福音書でも、パンをいただくのはみなクタクタになっている時にいたでいています。そういう窮地に救いがもたらされてきているのに、しかも、その救いをパンという形で顕されている。その本質は何なのか、何のためにこの御業をなさっているのか、ということには気づいていない。それが人間の姿でした。

ヨハネのほうではこの6章にパンの奇蹟があつて、そのあとにパン問答が出てきます。そこでエッセンスは、

「<sup>35</sup>イエス言い給う『われは生命のパンなり、……<sup>40</sup>わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。』」

つまり、「私というパンを喰らう者は永遠に生きる」と。そして一番最後のところで、

……<sup>63</sup>活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」（ヨハネ6・35、63）

と。それがイエスさまの言いたかつたことである。

それから、7章へ行きますと、<sup>かりお</sup>仮庵の祭りの時にイエスはあとから祭りに参加されて、問答の中で言っておられることです。

#### 《第7章 仮庵の祭りにて》

「わが教えはわが教えにあらず、我を遣し給いし者の教えなり。人もし御意を行わんと欲せば、この教えの神よりか、我が己より語るかを知らん。』」

聞く者が本当に御意を求めて、御意に添いたいという切なる思い、己をかなぐり捨てた思いで私の言葉を聞くならば、これは神さまから出た言葉なのか、いわゆる人間イエスが人間的な思いで語っている言葉なのか、すぐわかる。それ以外に検証の手段はないということを書いておられる。

それから8章へ行きますと、

#### 《第8章》

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」

「なんじらは下より出で、我は上より出づ、……汝らもし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし」

「我を遣し給いし者（父なる神）は、我とともに在す。我つねに御意に<sup>かな</sup>適うことを行うによりて、我を独りおき給わず」

真理は自由を得させる…

「汝ら常にわが言に居らば、真にわが弟子なり。また真理を知らん、真理は汝らに自由を得さすべし」

「人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし」

「アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり」



第9章 生まれながらの盲人の癒し

「この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。」

第10章 羊と羊飼

「我は羊の門なり」

「我は善き牧者なり、我は羊のために生命を捨つ。」

「人これを我より取るにあらず、我みづから捨つるなり。」

「我かれらに永遠の生命を与えれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、彼らをわが手より奪う者あらず。……誰にでも(彼らを)父の御手よりは奪うこと能わず。

我と父とは一つなり」

第11章 死せるラザロを復活させたもつ

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」

第12章 ラザロの宅にて マルタとマリヤ マリヤによる香油の注ぎ

「二粒の麦、地に落ちて死なずば」

総括の言:12・44～50

これがここまでの締めくくりの言葉なんです。

「44 イエス呼わりて言い給う『われを信する者は我を信するにあらず、我を遣し給いし者を信じ、45 我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。46 我は光として世に来れり、すべて我を信する者の暗黒に居らざらん為なり。47 人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審かず。48 夫わが来りしは世を審かん為にあらず、世を救わん為なり。49 我を棄て我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みづから、我が言うべきこと語るべきことを命じ給いし故なり。50 我その命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに我が父の我に言い給うまを語るなり』(ヨハネ12・44～50)」

これが締めくくりなんです。13章からは、弟子たちとの最後の別れの場面に臨みますから、一応、人々との対話というのはこの12章で終わっている。その最後の締めくくりが今読みあげたところです。

ここまでのところを私はずっと拾ってみました。おわかりいただいたように、自分たちのほうが何か積極的に「こういうわざをしよう」ということは何一つ言っておられない。

「この戒めを守れ。己の如く隣りを愛せよ。己を捨てて己が十字架を負いて我に従え」

とか、何も言っておられない。一方的に神さまは働く神さまです。恵みを一方的に与える神さまです。恵みに恵みを加える神さまなんです。我々のほうは、恵みに恵みを受けると



いう、もつばら受け身なんです。それを素直に、あの「シロアムの池で目を洗いなさい」と言われて、「はい」と言って洗う。あれは律法の世界ではない。イエスを信じて、言われた通りにした。そうしたら、その通りになった。つまり、恵みの御業、人の思いを超えて働き給う恵みの御業を素直に「はい」と言って受けとった者に御業が働いている。

「父は今にいたるまで働き給う。安息日とは父が働き給う日である」

と言われた。そんなふうには、神さまは働き給い、救い給い、生命を与え給う。それがイエスを通して顕された神さまの姿です。それに対して我々はそれをひたすらお受けする立場です。これが貫かれている。これをしつかり受けとっていただきたいと思います。

そして今度は、13章以下では弟子たちの足を洗い給う。

《第13章 弟子の足を洗い給うイエス》

新しき戒めの付与（汝ら相愛すべし）

第14章～第16章 別れに際して弟子たちに語る（訣別遺訓）》

この14章から16章の言葉は本当に弟子たちに与えられたとおきの言葉です。それまではまだ一般の人たちに対して語っておられる言葉です。それも恵みであるにちがいない。けれども今度は、内弟子たちに対して語られた。我々は、皆さんは内弟子でしょ。内弟子に最後に別れて、滾々（こんこん）と語られた言葉として編集された。それをそのまま受けとる。何の躊躇（ちゅうちよ）もなしにそのまま受けとる。

「生命を与える、生命を与える」

と仰ったことがそこに凝縮されている。そして、

「聖霊を受けなさい。助け主がくる。助け主があなた方をあらゆる真理に導いていく。今まではいろんなことがわからなかっただろう。しかし、このお方が来たら、まず栄光を私に得させる。キリストの栄光を顕し、そして今までに語っておいたこと、御業、その奥義を全部そのお方が示してください。私は、姿は見えなくなる。けれども、助け主である聖霊という姿であなた方を導いていく。だから、大丈夫だよ」

ということを言われた。これが12章から16章です。

そして、17章は最後のお祈り、大祭司の祈りです。それからあとは、受難、そして復活というところが続いていく。

《第17章 最後の祈り（大祭司の祈り）》

第18章～第19章 十字架への道 ピラトとイエス 十字架の上で

第20章 死人の中より甦（うち）えり給いしイエス 「マリヤよ」「トラボニ」

第21章 テベリヤの海辺にて》

ヨハネの福音書が我々に語り告げているのは——正に我々は東洋人で、しかも律法だとかユダヤ教だとかは無縁な人間——そういう人間に対してです。しかし、宗教の世界は伝



えられました。神道もあれば、儒教もあれば、仏教も来ている。それも深められている。いろんなものが日本には既に伝えられ、耕されている。そのよく耕された土地にこの純粹なヨハネの生命の世界がボーンと入り込んでくる。その上でルカ伝を読んだり、マタイ伝を読んだり、いろんなものを読む。そういう読み方をしていいのではないのでしょうか。そうしたらまた、マタイはマタイの味が出てくるし、ルカはルカの味が出てくる。律法で恐ろしいことが言われても、何も恐れることはない。

そういうことをきちんと、論理的に「こうだよ」と納得させるのがパウロです。パウロは律法の世界に生きて来た人でしょ。律法の世界で行き詰まって、しかもキリストを十字架に付けることに賛成の人たちの流れですから、クリスチャンを迫害していた。それが引っくり返されて、パウロは

「イエスの救いというのはすごい。ただ信じるのみ。律法は呪いだ」

とまで言った。やはり、パウロという複眼的な目で見て——両方の世界を、あの世とこの世を、地獄と天国を両方知っている——そういうパウロという方の複眼的な目を通して、我々が置かれているこの福音の恵みの世界がどんなに素晴らしいか。これを受けとる。全世界の人も、どんな宗教の人であっても、そういう既存の宗教という範疇を乗り越えて、突き破って、今まさに21世紀のこんな宇宙衛星の世界に生きている我々が、しかしその自然科学的なそういった世界を乗り越えて、あるいはその世界の限界を突き破って、まさにきたるべき世界、天界から差し込んで来ている世界、光。それも終りが近ければ近いほど、闇が濃ければ濃いほど光は強くなってきたいるはずなんです。その光を無条件に受けとるのに、何の妨げがあるうか。何の資格が要るのだろうか。

ヨハネの一番初めにありました。

「彼は己の国に来たのに、誰も受けとらない。しかしながら、これを然りと受けとった者には、彼は神の子となる権を与えた。資格を与えた。無条件に神の子とする道を開いた。その人たちはもはや人の願いでも、肉の願いでも、その他もろもろの既存の観念によらない。ただ神によつてのみ生まれたのである」

と。そうでしょ。そして、

「律法はモーセによつて与えられたけれども、恵みとまことはキリストを通してやって来た。我々は恵みに恵みをくわえられている」

と言ってくれている。そういう角度から見ますと、何か凄い広い世界へ我々は導かれているという感じがしませんですか、皆さん。喜んでくださいね。

それが今日の締めくくりです。それでは終りいたします。



## ● 祈り

では、お祈りいたします。

主イエス・キリストさま。11回にわたって、このヨハネ福音書を行ったり来たりしながらやって参りました。しかし、今日到達したところは、本当にあなたの恵みそのものなる世界。これは既にマタイ・マルコ・ルカの福音書においても、あの天国的な事態が、あなたという天国体そのものによって語られておりました。あの崇高な次元でございましたが、それは人々にはとうてい受け入れるところではありませんでした。しかしながら、あなたに無条件ですがつた人にはあなたは惜しみなくそれを与えていかれました。そういう世界が、ヨハネ伝に参りますと、もうあらゆる律法を乗り越えて、およそ律法でない世界、恵みそのものである世界をあなたは示してください、しかも、ヨハネ福音書で働いておられるのはあなたご自身でありました。人は全く働いておりません。

「神の業<sup>わざ</sup>とは、父の遣<sup>わ</sup>し給いしお方を信ずる、これに尽きる。あなた方は、朽ちる糧<sup>かて</sup>ではなくて、永遠の生命に至る朽ちない糧のために、それを求めて働きなさい」

と言われました。まさにそれは人の子が与えるものであると。ヨハネ福音書はずばり、「我を食らい、我を飲め」

と。この世的な肉の次元のものは、究極的な角度から見るときには役立たない。

「霊の次元に、新しく生まれるように。神さまが無条件で与え給う絶対界からの生命の世界、これをただ無条件に平伏して受けとるように。それを与えるために私は遣わされてやって来た。私はそのためにどんなことでもする」

と。そしてあのゲッセマネの苦しみを耐え抜いて、ご自身は死を味わい、苦しみを味わい、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

とまで叫び給い、そして、

「彼らを赦してください。彼らはそのしていることがわからないからです」

と、我々の弱さを思いやって、執り成してくださいと、そして、

「わが霊を聖手に委ぬ」

と、最後まであなたに従い切られたイエスさまが、あの墓の中に葬られ放しであるはずがありません。神の御力によって、聖霊の御力によって、あなたは変貌して顕れてくださいました。その顕れ方がさまざまでありましたように、福音書は混乱していますが、むしろ混乱しているところこそ、真実が語られている。そう言いたいくらいです。

「我は復活<sup>いのち</sup>なり生命なり。我を信ずる者は死すとも生きん。およそ生きて我を

信ずる者は永遠<sup>とこしえ</sup>に死なざるべし」

と。本当に私たちはあなたをいただいて、たとえ肉体は滅びましても、わがうちに形作られたあなたの永遠の生命は日に日に新しく成長しております。そして、時至って、この身



体を脱ぎ捨てて、あなたの御許に吸い寄せられ、あなたに相まみえる時が迫っています。そのような大希望をあなたは与えてくださいました。そして、あなたは地上を愛して、本当にひと一人一人を愛して、幼児<sup>おさなご</sup>を愛して、また万物を愛して、これに生命を与えようとしてくださったお方でございます。

「父が私を愛されたように、私もあなた方を愛した。あなた方がそのように互いに愛し合いなさい」

と、それが唯一のあなたさまの戒めでございました。どうぞ、この原点に立ち返って、どの民族も、人種だとか血統とか、そういつたこの世的な次元を突き破って、本当に霊なる人として、霊なる神さまが私たちを愛し、いとおしみ育んでくださる、その生命のご愛に「はい」と言って受けとって進んで行くことができますように。まさに信、あなたのご愛を受けとる信、そしてその中に生きる信、それがあなたが望んでいらつしやることでございます。どうぞ、そのような絶対的な角度から、無条件のご愛を無条件にいただき、

「誰でもキリストに在るならば、新しく創<sup>つく</sup>られたる者なり。旧きは過ぎ去り、見よ、一切は新しくなりたり」

と語られていますように、私たちはこの地に在りながら、しかし、常にそれを乗り越えつつ乗り越えつつ、まるで海の上をペテロが歩いたように、あなたの聖手にしっかりと捉えられて、この世を雄々しく勇氣をもつて生きていくことができますように、一人一人を強めてください。

この尽くしませぬ感謝と讃美と祈りを、兄弟姉妹の胸にあふれる感謝と讃美と祈りと共に主イエス・キリストの尊き聖名<sup>みな</sup>を通して御前<sup>みまえ</sup>にお捧げいたします。アーメン。

## ●【ヨハネによる福音書の総括】(レジメ)

### 第1章1～18 序文

この箇所は、序文であるとともに、総括でもある。

天地・万物の創造前からの霊なる実在者である父なる神と、同質の霊なる実在者である御子キリストとの共在のすがたを語る(①)。

万物は、このお方(御子キリスト)によって創造された。このお方は、生命<sup>いのち</sup>であり、光であり、愛であった。

霊なるキリストは、受肉して人々の間に、即ち、人間界に住まわれた。神は、このお方を信じて受け入れる人を「神の子」とする道を聞かれた(②)。

かつては、律法の実行による義の道がモーセを通して示されたが、「恵みと真理<sup>まこと</sup>の化身で



あるイエス・キリストを信じ受け取ることによって、天国(永遠の生命)に至る道が聞かれたのである。

受肉のイエスは、地上においても、その全存在が、いつも父なる神の懐に懷かれてあり、このお方だけが、見えない神(根源的・靈的実在者である見えない神)を顕していたのである(③)。

①17・5参照 ②3・13～18… 同31～36 ③14・9

第1章19～ 重要なところ…

「見よ、これこそ世の罪を除く神の子羊」(1・29)

「これぞ、聖霊にてバプテスマを施す者」(1・33)

「見よ、これぞ神の子羊」(1・36)

第3章

「人あらたに生ずれば、神の国を見ることは能わず」

「人は水と霊によりて生れずば、神の国に入ること能わず、肉によりて生る者は肉なり、霊によりて生る者は霊なり。」

新生への道は、神の遣わし給うた御子キリストを信じ受け取る(信受する)こと。

第4章 サマリヤの女との対話 キリストは「永遠の生命の水」の源泉

真の礼拝…

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」

イエスの食物…

「われを遣し給へる者(父なる神)の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは、これ、わが食物なり。」

第5章 ベテスダの池での癒し(38年間、病に悩む人に対して安息日に)

「わが父は今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり」

無的実存者(無者) イエス…

「子は、自ら何事をも為し得ず」

第6章 大麦のパン五つと小さき魚二つ

「我は生命のパンなり」

「わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る、是なり。」

「われ(というパン)を食ふ者は永遠に生きる」

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」

第7章 仮庵の祭りにて

「わが教えはわが教えにあらず、我を遣し給ひし者の教えなり。人もし御意を行はんと欲せば、この教えの神よりか、我が己より語るかを知らん。」

第8章



「われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」  
「なんじらは下より出で、我は上より出づ、……汝らもし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし」

「我を遣し給ひし者(父なる神)は、我とともに在す。我つねに御意に適ふことを行ふによりて、我を独りおき給はず」

真理は自由を得させる…

「汝ら常にわが言に居らば、真にわが弟子なり口また真理を知らん。真理は汝らに自由を得さすべし」

「人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし」「アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり」

第9章 生まれながらの盲人の癒し

「この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯れん為なり。」

第10章 羊と羊飼ひ

「我は羊の門なり」

「我は善き牧者なり、我は羊のために生命を捨つ。」

「人これを我より取るにあらず、我みづから捨つるなり。」

「我かれらに永遠の生命を与ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、彼らをわが手より奪う者あらず。……誰にでも(彼らを)父の御手よりは奪ふこと能わず。

我と父とは一つなり」

第11章 死せるラザロを復活させたもう

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」

第12章 ラザロの宅にて マルタとマリヤ マリヤによる香油の注ぎ

「二粒の麦、地に落ちて死なずば」

総括の言…12・44～50

第13章 弟子の足を洗い給うイエス

新しき戒めの付与(汝ら相愛すべし)

第14章～第16章 別れに際して弟子たちに語る(訣別遺訓)

第17章 最後の祈り(大祭司の祈り)

第18章～第19章 十字架への道 ピラトとイエス 十字架の上で

第20章 死人の中より<sup>うち</sup>起えり給ひしイエス 「マリヤよ」「ラボニ」

第21章 テベリヤの海辺にて

